

震災を語り継ぐ映像記録・ビデオ教材の開発

——宮城・石巻の現状を伝える——

柄 窪 優 二*

Production of Documentary Films to Preserve the Story of the 3/11/11 Disaster

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

東日本大震災は死者・不明者が約1万8千人。日本では経験のない自然災害で、新聞・テレビは報道機関として一定の役割を果たしたものの、災害報道という視点では様々な課題が浮き彫りになった。災害報道は、復興支援や防災対策の策定、防災意識の向上のため、正確な事実を伝えるほかに、バランスの取れた継続性、長期的な視点が求められる。しかしテレビ報道では、現実に直面する目の前の報道が優先され、長期的な視野に立った映像記録を残すことは難しいのが現状である。現場の取材者は組織内の人事異動があり、継続して震災報道を担当するのは困難でもある。千年に一度の大震災の教訓を次世代に正確に伝えることは、この時代に生きる我々の責務であるが、それを果たすことは容易なことではない。そこでジャーナリズムの視点で、被災地の復興に向けた実証的な映像記録・ビデオ教材を制作し、それを活用して東日本大震災を次世代に語り継ぎ、復興支援や防災意識の向上、防災対策の策定を促進しようという実践研究に取り組んだ。千年に一度と言われる東日本大震災の復興に向けた映像記録を制作・公開する、大学と被災地との連携プロジェクトでもある。

本研究は市町村の中で死者・不明者が約3800人と被害が最も深刻な宮城県石巻市をフィールドにして、震災1年目～5年目までを定点取材・撮影する形で、映像記録・ビデオ教材を制作した。復興に向けた被災地の撮影、住民のインタビュー、地元メディア関係者のヒアリング調査などを実施し、完成した映像記録はインターネットで公開すると共に大学・高校、地域の資料館などにビデオ教材・展示資料として提供した。また映像記録はどのように活用されたか、教育機関や資料館等での活用事例についても、分析・評価を試みた。この研究は現在も継続しているが、本稿では2016年5月までの震災発生から約5年間に実施した研究実績について報告する。

* 文化情報学部 メディア情報学科

1. 震災を語り継ぐ映像プロジェクトの概要

研究方法は、(1)被災地を取材・撮影する、(2)それをもとに映像記録を制作する、(3)制作した映像記録を発信・活用、分析・評価する、という3段階で実施した。研究フィールドを宮城県石巻市とその周辺に決めた理由は、・石巻市は市町村のなかで震災被害が最も大きいこと、・震災被害の課題や問題点がほぼ浮き彫りになる地域であること、・地元関係者の協力が得られること、・著者が石巻地方での報道取材経験があり地域事情を理解していること、などからである。具体的な研究方法は下記の通りである。

(1) 被災地の取材・撮影

宮城県石巻市とその周辺の取材・撮影は、震災50日後の2011年4月下旬からスタートした。毎回、名古屋から現地に向いて取材・撮影を実施した。このため現地取材は1年間に4回程度実施することに決めた。1回の取材期間は3日～5日で、取材対象や制作予定、著者の時間的な余裕などから日程を決めた。その結果、2016年3月までに実施した現地取材は下記の通りで、計22回実施した。

【2011年度・現地取材】	4月, 7月, 2月, 3月	=計4回
【2012年度・現地取材】	7月, 10月, 12月, 3月	=計4回
【2013年度・現地取材】	6月, 7月, 12月, 3月	=計4回
【2014年度・現地取材】	6月, 8月, 12月, 2月	=計4回
【2015年度・現地取材】	5月, 7月, 9月, 12月, 2月, 3月	=計6回

現地取材は、原則として著者1人で実施したが、カメラの撮影助手等が必要な場合もあり、必要に応じてボランティアの私設助手を同行した。2014年6月、2015年2月、2016年2月には、希望するゼミ学生を同行した。学生はあくまでも個人的な参加なので、保護者の許諾を得ることと、旅費を自己負担することを条件に同行した。

撮影はハイビジョンカメラで映像記録した。2011年はテープに映像を記録するHDVカメラを使用した。2012年以降はSDカードに映像を記録するAVCHDカメラを使用した。現地の移動は当初は徒歩で、必要に応じてタクシーを利用した。2013年ころからはレンタカーが容易に借りられるようになり、車を利用している。そうした事情で2013年度以降は取材対象を、石巻市中心部から拡大し、市内から離れている大川小学校や隣接する女川町、牡鹿半島の半島部地域などに広げた。

(2) 映像記録の制作

映像記録は現地で取材・撮影したあとに、大学・スタジオで映像編集して、ナレーション収録、音声調整、音響効果、字幕スーパー処理をして、作品を完成させた。本研究では、原則として映像記録＝ビデオ教材という方針で、映像記録はそのまま震災を語り継ぐビデオ教材になるように構成した。インターネット動画公開を前提に作品1本の長さを5～6分にした。ただし、そうしたシリーズ映像を再構成する形で長さ30分程度のドキュメンタリーも制作した。構成や映像編集は原則として著者1人で行ったが、ナレーション

や音声収録・仕上げではゼミ学生が研究協力者として担当した。作品によっては学生が編集を担当したケースもある。

映像記録は、どのような内容を、どんな切り口で伝えるか、という作品テーマが重要になる。今回のプロジェクトでは、被災地の現状を客観的に伝えることを目標にしているので、①復興に向けた地域の動き、②被災地の現状や課題、③住民や関係者の思い、などを映像で伝えるテーマを設定した。映像記録1本を編集・完成するのに要する作業は、映像編集＝1日、音響効果・音声調整・字幕スーパー＝0.5日、本番ナレーション収録・仕上げ＝0.5日、合計2日で行うことを基本にした。たとえば映像記録2本を3泊4日で現地取材した場合、作品1本あたり取材・撮影（2日間）＋編集・仕上げ（2日間）で、完成させるまで計4日の作業が必要になる。こうした前提で1年間に映像記録を5本程度制作する方向で研究計画を立てた。

(3) 映像の発信・活用、分析・評価

映像はインターネットで公開することを前提に企画・制作した。このため取材段階では事前に対象者に、映像公開の同意を確認して撮影を進めた。インターネットでの公開は、椋山女学園大学 YouTube サイト（東日本大震災シリーズ）と椋山女学園大学文化情報学部サイトで、制作した全作品を動画公開した。大学サイトで公開後は、国立国会図書館サイトや震災関連の映像サイトなどが公開サイト（ページ）にリンクを貼る形で独自に公開した事例もある。制作した映像記録は、著者が大学の授業や高校生向けの講座等で活用すると共に、依頼のあった教育機関等に貸し出しを行った。被災地の小中学校の防災教育の教材などにも活用された。また石巻市内の2つの民間の震災資料館に寄贈し、震災の映像記録として館内で上映展示されている。本研究は震災を映像で語り継ぐことが第一の目的であるが、可能な範囲で映像コンテンツの分析・評価も試みた。

2. 映像の制作

今回のプロジェクトでは、インターネット公開を前提にした1本の長さが5～6分の映像記録を42本、インターネット公開と共に映像祭等への参加を意識して制作したドキュメンタリーを6本、海外へのネット発信をめざして英語のナレーションと字幕スーパーを入れた英語版コンテンツを2本制作した。制作・公開した作品は下記の通りである。

(1) 映像記録

- シリーズ1 「6枚の壁新聞から1年～記者が語る被災地・石巻」(5分31秒), 2012年2月
- シリーズ2 「被災者の思い～記者が語る被災地・石巻」(6分46秒), 2012年2月
- シリーズ3 「津波被災・記者として～九死一生の体験を語る」(6分03秒), 2012年3月
- シリーズ4 「復興への道のり～記者が語る被災地・石巻」(5分45秒), 2012年3月
- シリーズ5 「地域の絆を再生へ～学生ボランティアの記録」(5分46秒), 2012年3月
- シリーズ6 「その時、リーダーは～新聞・経営者の決断」(4分53秒), 2012年8月
- シリーズ7 「地域の絆を再生へ～女川・復興農園の記録」(4分30秒), 2012年8月
- シリーズ8 「絆の駅・石巻ニューゼ～地域の情報を発信」(5分00秒), 2012年11月

- シリーズ9 「女川・復興農園の秋～仮設住民の思い（前編）」（5分33秒），2012年11月
シリーズ10 「女川・復興農園の秋～仮設住民の思い（後編）」（5分52秒），2012年11月
シリーズ11 「震災から2年・石巻～祈りの灯り・希望の灯り」（3分36秒），2013年3月
シリーズ12 「被災地から発信～石巻日日こども新聞」（5分57秒），2013年3月
シリーズ13 「被災地・石巻の復興～震災から3年目」（5分47秒），2013年7月
シリーズ14 「かんぱろう！石巻～地元住民の思い」（5分00秒），2013年7月
シリーズ15 「石巻川開き祭り～震災3年目の夏」（5分00秒），2013年8月
シリーズ16 「震災後の金華山～こども記者が取材」（6分30秒），2013年8月
シリーズ17 「石巻のお魚事情～2013年夏」（4分30秒），2013年8月
シリーズ18 「3年目の冬～震災被災地・石巻」（4分40秒），2013年12月
シリーズ19 「震災から3年～被災地・石巻」（5分23秒），2014年3月
シリーズ20 「震災から4年目～被災地 宮城・石巻」（6分15秒），2014年7月
シリーズ21 「大川小学校の今～被災地 宮城・石巻」（6分55秒），2014年7月
シリーズ22 「4年目の夏から～被災地 宮城・石巻」（5分50秒），2014年8月
シリーズ23 「夢は日米の架け橋～テイラー・アンダーソン記念基金」（6分40秒），
2014年8月
シリーズ24 「地域を再生へ～4回目の冬 宮城・石巻」（6分20秒），2015年1月
シリーズ25 「地域情報を伝える」（5分00秒），2015年4月
シリーズ26 「犠牲者の思いを伝える」（5分30秒），2015年4月
シリーズ27 「津波被災・記者が語る」（4分55秒），2015年4月
シリーズ28 「新しい地域メディアを作る」（5分15秒），2015年4月
シリーズ29 「鉄道が全線開通～5年目の春・石巻」（4分30秒），2015年6月
シリーズ30 「震災被災地は復興へ～5年目の夏・石巻」（5分10秒），2015年8月
シリーズ31 「5年目のボランティア～震災被災地 宮城・石巻」（6分30秒），2015年8月
シリーズ32 「ふれあい農園・4年目～宮城・女川町の現状」（6分16秒），2015年9月
シリーズ33 「石巻魚市場が完成～防災への備え」（6分36秒），2015年9月
シリーズ34 「5年目の冬・石巻～復興への歩み」（6分20秒），2016年1月
シリーズ35 「海が見える町～宮城・女川町の復興」（6分20秒），2016年1月
シリーズ36 「震災から5年～3.11 石巻の1日」（5分30秒），2016年3月
シリーズ37 「震災5年・復興の歩み～石巻の映像記録」（6分30秒），2016年3月
シリーズ38 「3.11 そして未来へ～石巻市民のメッセージ」（4分15秒），2016年3月
シリーズ39 「6枚の壁新聞から5年～被災地・石巻の現状」（6分45秒），2016年5月
シリーズ40 「前を向いて歩こう～『石巻の英国人』の思い」（6分50秒），2016年5月
シリーズ41 「被災地を元気に！～石巻焼きそば」（6分15秒），2016年5月
シリーズ42 「小さな命の意味～震災5年・大川小学校」（6分30秒），2016年5月

(2) ドキュメンタリー

- 「心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の1年」（29分00秒），2012年6月
「地域の絆を発信へ～女川・復興農園の願い」（17分15秒），2013年7月
「絆の駅・石巻～復興3年目の春」（23分45秒），2013年7月

震災を語り継ぐ映像記録・ビデオ教材の開発

「津波には負けない！～石巻・住民の思い」（17分00秒），2014年7月

「6枚の壁新聞から4年～被災地・石巻の願い」（29分30秒），2015年7月

「3.11 そして未来へ～石巻・絆・震災5年」（30分00秒），2016年5月

(3) 英語版コンテンツ

シリーズ1 英語版

「One Year After the Six Handwritten Wall Newspapers

—The Reality of Ishinomaki Hibi Shinbun—」（5分46秒），2012年3月

シリーズ23 英語版

「“To Be a Bridge Between Our Two Nations”

～ The Taylor Anderson Memorial Fund ～」（6分40秒），2014年10月



写真1 石巻市「絆の駅」での取材（2016年2月）



写真2 石巻市復興まちづくり情報交流館での取材（2016年2月）

3. 映像の公開・活用

制作した映像記録は、全てインターネットで公開した上で、希望する震災資料館等に提供する形で公開した。また大学や高校、小中学校の教材ビデオとしても活用された。詳細は下記の通りである。

(1) インターネット公開

映像記録は完成した2012年2月から順次、椋山女学園大学文化情報学部サイト¹⁾で公開した。2013年8月からは椋山女学園大学 YouTube サイトを開設して、同サイトの再生リスト「東日本大震災シリーズ」²⁾で公開した。2015年1月からは、栃窪研究室サイト「映像で伝える！ジャーナリズムの世界～椋山女学園大学 栃窪研究室」でも、大学 YouTube サイトにリンクを貼る形で公開した。動画公開の際には、研究室サイトや大学サイト等で公開のお知らせを掲載した。こうした公開情報や動画公開ページは、国立国会図書館（図書館に関する情報ポータル）³⁾など多数の WEB サイトが独自にリンクを貼るなどして紹介した。インターネットでの動画へのアクセス数（総数）は、大学学部サイトは技術的な理由でアクセス数が把握できないが、椋山 YouTube へのアクセス数は2016年5月現在で約2万9千回であった。最もアクセス数が多かった動画は、シリーズ21「大川小学校の今～被災地 宮城・石巻」（6分55秒・2014年7月）の1万3千回であった。

(2) 資料館等での上映展示

ネット公開した映像記録は、上映展示を希望する資料館等に対して個別に DVD 版にして寄贈した。石巻市にある「絆の駅・石巻ニューゼ」では DVD 版を利用して2013年1月より上映展示がスタートした。この資料館は、石巻日日新聞社が震災復興に向けた地域の交流拠点として開設した資料館で、館内では常時、長さ6分程度の映像記録を5本～10本程度、連続リピート上映している。

また石巻市にある「石巻3.11あすのためのミュージアム」も館内展示を希望していて、2015年9月までに制作した震災記録＝計33本をリピート上映できる DVD 版にして提供した。この資料館は地元企業が NPO の協力で運営していて、屋上に独自の防災用ヘリポートを設けるなど、防災に強い街づくりを民間レベルで推進している。

(3) 教育現場での活用

映像記録は大学や高校・小中学校で教材として活用されている。このうち著者が活用したのは下記の通りである。

- ・椋山女学園大学文化情報学部メディア情報学科の専門教育科目「ジャーナリズム論」、「テレビ制作概論」、「取材活動論」、「現代社会とジャーナリズム」の教材（主に映像ジャーナリズムの実践例紹介）として活用。（2012年度～）
- ・椋山女学園大学の全学共通科目「安全学」で防災教育の教材として活用。（2015年度～）
- ・椋山女学園高校の土曜講座で東日本大震災を語り継ぐビデオ教材として活用。（2012年度）
- ・あいちの大学「学び」のフォーラム（高校生向け講座）の教材として活用（2013年度）

このほか著者からの映像提供をもとに下記で教材として活用された。

- ・埼玉県の私立高校（1校）で震災被災地を訪問する修学旅行の事前教材として活用
- ・石巻市の中学校（1校）で防災教育の教材として活用
- ・石巻市の小学校（1校）で防災教育の教材として活用
- ・中国の温州大学と同大学の専門学校で日本事情や日本語の教材として活用

4. 映像コンテンツの分析・評価

本研究では2016年5月までに計50本の映像作品を制作した。それぞれ作品のテーマや狙い、取材・制作の過程が異なり、それらのコンテンツを一括して分析・評価することは困難である。そこで、これまでに部分的に実施した教材活用時の受講生アンケート結果を報告した上で、教材として活用している教員と映像記録を上映展示している資料館担当者の感想・評価を報告する。（下記(1)部分は『椋山女学園大学研究論集』44号（2013）掲載原稿⁴⁾を再掲載したものである。）

(1) 教材活用授業の受講生アンケート

著者が2012年度に椋山女学園大学文化情報学部で映像記録を教材として活用した授業「文化情報論～社会と情報～」(受講生1年生=253人)と、椋山女学園高校で行った土曜講座「東日本大震災を語り継ぐ～映像ジャーナリズムの舞台裏」(受講生22人)において、受講生を対象にしたアンケートを実施した。その結果⁴⁾は表1の通りである。

表1 震災映像ドキュメント・教材活用の受講生アンケート結果

(回答者) 大学生253人 高校生22人	Q1 教材としては？		Q2 学習の役に立ったか	
	大学生	高校生	大学生	高校生
とても良い・とても役立った	131	13	102	10
良い・役立った	111	9	134	11
普通	7	0	13	1
やや悪い・少し役に立った	2	0	1	0
悪い・役に立たない	0	0	0	0
未回答	2	0	3	0

アンケートの自由記述では下記のような回答が寄せられた。

(大学生)

- ・映像を使用することで、大切なことを、確実にわかりやすく、知ることができた。
- ・新聞やテレビなどの伝える情報が、情報（事実）の一部でしかないことがわかった。
- ・1つの視点だけでなく、多くの視点で見ることが、大切だと思った。
- ・現地の映像（音声）を見たことで、震災についてさらに深く考えようと思った。
- ・ボランティアなどとは別に「情報を発信すること、伝えること」の大切さを学んだ。
- ・社会の動きと密着した授業は、社会と情報との関係が良くわかった。

(高校生)

- ・震災被災地の様子を知るとても良い機会となった。
- ・新聞記者の取り組みやインタビューを聞くことで、新しい視点を持たた。
- ・心の復興、提案型ボランティアが必要な、被災地の状況がわかった。
- ・今後の地震などに対する備えについて深く考えるきっかけとなって良かった。
- ・新聞やテレビでなくても、市民（大学）が情報発信可能なことがわかった。
- ・震災を絶対に忘れてはだめで、次の世代に伝えることが大切だと思った。

(2) 教材活用の教員評価

2014年度から映像記録を教材として活用している中国・温州大学の日本語教員、木村和幸さんにヒアリング調査した。それによると使用目的は、教員の自己紹介のほか、日本文化を紹介する授業（石巻の状況紹介）や日本語の授業（聞き取りの教材）の教材だった。



写真3 石巻市「島金商店・石巻やきそば」の取材（2016年2月）



写真4 石巻市立大川小学校での取材（2016年2月）

映像を教材として活用した感想は下記の通りであった。

- ・教室のスクリーンに映し出す場合、人物の顔が大き過ぎて、迫力があり過ぎた。
- ・シリーズを連続して見る場合、重複している映像が比較的多く、飽きることがあった。
- ・中国で日本語教材として使用するときは、中国語字幕と日本語字幕両方があると良いと思った。吹き替えは必要ないので、日本語字幕だけでもいいと思った。
- ・震災後の映像がほとんどだが、津波が押し寄せてきた映像も、もっとほしかった。
- ・担当している講義は女子学生が多いので、石巻のファッション、食文化、漫画の文化も紹介してもらえると良かった。

(3) 館内上映している資料館の評価

この映像を館内上映している「絆の駅・石巻ニューゼ」の館長・武内宏之さんの感想は下記の通りであった。

- ・復興に向けた歩みをわかりやすく映像にまとめてあって良かった。
- ・「絆の駅」は修学旅行で訪れる生徒も多く、来館者は関心を持って映像を見ていた。
- ・修学旅行の生徒を引率する先生が事前下見で訪れるケースもあり、修学旅行の事前学習に活用したいので、DVD版を借りたいという申し出も複数あった。
- ・「絆の駅」は地元の人が多く訪れるので、映像を見たことがきっかけになって地元の小中学校や地域の団体で映像を活用するなどの広がりができた。
- ・今後も映像を通して被災地に現状を発信してもらいたい。

5. まとめ

(1) 研究の成果

本研究は映像で震災被災地の現状を語り継ぐことを第一の目的に取り組んできた。その結果、2016年5月までに映像記録は42本、その映像を流用する形で構成したドキュメンタリーは6本、英語版コンテンツは2本、計50本の映像作品を制作・公開するまで進展した。千年に一度と言われるほど被害が大きい震災なので、こうした取り組みがどこまで社会に貢献できたか分からない。しかしながら制作・公開した映像コンテンツの作品数だけを見れば、1年に5本程度という当初の研究計画を大幅に上回る結果になった。また取材フィールドに宮城県石巻市とその周辺を選定したことは、現時点では正しかったと判断している。石巻市には震災被災地の抱える様々な問題が凝縮されていて、都市規模がある程度大きいので、復興に向けた変化を映像で明確に捉えることができた。また石巻日日新聞社や東北福祉大学など、地元関係者の協力が得られたことも本研究を進める上で重要であった。

映像記録の客観的な評価は難しい。部分的な評価としては、震災2年目に映像記録5本を統合して再構成したドキュメンタリー「心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の1年」(29分)が、「地方の時代・映像祭2012」に入賞したことがあげられる。この作品は映像記録シリーズ1から5までを再構成してオムニバスドキュメンタリーにしたもので、こうした作品が映像祭で入賞することは珍しい。映像記録5本のメッセージ性が高かったことが入賞につながったとも考えられる。2012年度以降も可能な範囲でドキュメンタリー

の制作は続け、映像祭等に出品している。そうした作品は入賞に至らなくても、それを契機に全国のケーブルテレビ等で放送され、震災を映像で語り継ぐことができた。インターネットでは複数の外部サイトが大学サイトに独自にリンクを貼って、この映像を動画配信している。ネットでのアクセス数は、全体としては多くはないが、新聞報道等で取り上げられて話題になったこともあり、当初の目標は達成できたと考えている。最もアクセス数が多い動画は、シリーズ21「大川小学校の今～被災地 宮城・石巻」(2014年7月公開)で、2016年5月現在で約1万3千回のアクセスがあり、それ以降も毎月500程度の割合でアクセス数が増えている。大川小学校で次女を亡くした佐藤敏郎さんが、「なぜ避難できなかったのか？」という疑問を強く訴えている。インターネットでも視聴者の目は確かで、貴重な証言を記録した映像は大勢の人が関心を持って見ることを改めて実証した形になった。

制作者として映像記録を自己評価すると、限られた取材・撮影日程のなかで、ある程度満足できる内容を維持できたと考えている。ただし、もっと映像で明確に変化が浮き彫りになる切り口を積極的に取り上げることができなかったのか、という企画面での反省はある。復興に向けた街の変化を映像記録するという点は、震災後1年目から2年目は、当初の計画通りできたと受け止めている。しかし震災後3年目以降は、災害復旧工事や集合住宅建設は増えてきたが、映像でわかるそれ以外の変化はあまり見られなくなった。映像記録としては外観的な変化だけでなく、地元の人たちが何を思い、何を感じているのか、という被災者の内面的な視点も伝える必要が生じた。そこで2014年度からは地元のメディア関係者などへのインタビュー取材を積極的に取り入れて、映像記録を構成するようにした。映像記録としては、大変難しい段階に入ってきたと感じている。

一方、ビデオ教材としての評価は明確には判断できない。本研究では、映像記録をそのままビデオ教材に活用することを前提にして、特定のシラバスに適合する形でビデオ教材を制作・開発したものではない。このため本研究の目的である「震災を語り継ぐ」映像であれば、それで教材としての目的は、ある程度は達成できたと考えている。ビデオ教材の教育的な狙いや映像構成については、機会を設けて改めて検証したいと考えている。

今回の映像記録の制作・公開は、大学の研究者・教員が行っている実践研究だという点に大きな特徴がある。教員としては、そうした研究過程を学生の教育に最大限に生かしたいとも考えていた。この点については、作品の最終制作段階でゼミ学生がナレーターのほか、音声収録、音声編集、仕上げを担当し、質の高い教育の場にもなった。東日本大震災の映像制作を体験できるのは、映像制作者にとって貴重な実践経験でもある。学生にとっては、映像で伝えること、映像ジャーナリズムに正面から向き合うレベルの高い制作体験になった。こうした取り組みを通して、ゼミ学生から、実際に被災地を現地取材したいという希望が寄せられ、2014年度からは年1回は希望する学生を取材に同行するようにした。ただし学生の現地取材は、保護者の同意を得た上で、旅費を自己負担する個人的な参加に留まっている。将来的には大学と被災地との連携プロジェクトとして、学生が参加しやすくする正式な交流プログラムになれば幸いである。

(2) 今後の課題・展望

震災映像記録の制作・発信は、震災後10年は継続したいと考えている。映像を語り継

ぐこと、その映像をインターネットで発信することは、社会へのメッセージ性が強く、メディア情報、なかでも映像ジャーナリズムを専門にする研究者としては、今後も継続する社会的な使命があると考えている。そのためには、映像記録のテーマや切り口をどのようにするか、という点が今後の大きな課題になる。単に街の様子や外観をカメラで撮影するだけでは、映像記録としての役割を果たすことは難しくなっている。特定の地元関係者に焦点を当てた個別テーマの設定も必要になると考えている。ただしあくまでも客観的な映像記録という視点を維持する必要がある。震災から10年間の復興に向けた記録や地域の変化、地元住民の思いなどを、総集編として1本のドキュメンタリーにまとめることも必要だと考えている。教育機関・大学が独自に取り組むプロジェクトという視点では、学生に対する「映像ジャーナリズム」の実践教育として、今後も継続することが大切だと思う。

映像記録、映像コンテンツの制作態勢は、今後も研究者1人が名古屋から単独で取材に行き、独自の切り口で、被災地の現状を映像で伝えることになる。したがってマンパワーも含め限界もある。客観的な視点による映像記録を制作・発信するという基本方針を守りながらも、結果的には被災地・石巻の現状の一部だけを伝える形になる。そのとき被災地の現状の一部を伝える、あるいは一部しか伝えられないのなら、何を伝えることが最も必要なのか、というジャーナリズムの本質に向き合うことが求められる。そうした現状をしっかりと受け止め、映像ジャーナリストとしての感覚を大切に、震災10年までは取り組む必要があると考えている。

この研究は科研費25350270による研究成果である。取材・撮影に協力をいただいた被災地の関係者にお礼申し上げます。

参考文献等

- 1) 椛山女学園大学文化情報学部サイト (学生制作の映像作品・東日本大震災関連)
http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/media_a/index.html
- 2) 椛山女学園大学 YouTube サイト (再生リスト・東日本大震災シリーズ)
https://www.youtube.com/playlist?list=PLSh8ziKtq8lgFr7uG_qL9nZKWfq5A1IPL
- 3) 国立国会図書館 (図書館に関する情報ポータル) 「椛山女学園大学が震災シリーズ公開」
<http://current.ndl.go.jp/node/20119>
- 4) 柘窪優二 (2013) 「東日本大震災・映像ドキュメントの制作と発信——被災地連携プロジェクトの実践研究」、『椛山女学園大学研究論集』第44号 (社会科学篇) 87-102